

天吹同好会 44周年記念誌



曾於市教育委員会所蔵

天吹同好会
令和7年11月15日



表紙絵:作者:服部英竜 えいりゅう1842-1905 幕末-明治時代の日本画家。

天保13年生まれ。大隅国分郷向花(むけ)村の人。長崎にでて画をまなぶ。国分郷日当山温泉で湯治中の西郷隆盛にしばしば接し、犬をつれた狩猟姿の肖像画を描いた。明治38年死去。64歳。本名は有馬貞英。通称は喜右衛門。

画題

島津家臣平田三五郎宗次天吹を奏する図。平田は吉田大蔵清家と義兄弟の契りを結び、慶長4年(1599)の庄内の乱で、先に討死した大蔵に殉ずる。平田の精神と行動は武士に称賛され、後に武士間の衆道を描いた「賤のおだまき」のモデルとなった。この本は明治時代二才衆の間で愛読され、森鷗外も言及している。

目次

天吹同好会創立第四十四周年記念会を迎えて	白尾 國英……………	2
天吹と天吹同好会の概要……………		3
活動一覽……………		4
訃報・藤原先生の思い出	副会長 赤崎 紳一……………	12
随筆 薩摩武士に思いをはせて	会員 脇田 大輔……………	14
私と天吹との出会い	保護者 田中 あゆみ……………	14
天吹との出会い	会員 森 邦彦……………	16
天吹との出会い	会員 黒田 浩司……………	18
地方気質今昔	前会長 小濱 博道……………	21
小濱博道前会長文化財功労者受賞……………		22
天吹における学習過程とその文化的意義に関する研究 「研究の構想と課題」	渕上 ラファエル広志……………	23
プログラム……………		27

会長挨拶

天吹同好会創立四十四周年記念会を迎えて

天吹同好会会長 白尾 國英

天吹同好会は、昭和五十六年の結成以来、お陰様で本年四十四周年を迎えることができました。これもひとえに、発足当初から同好会を支えて下さった諸先輩会員の多大なるご尽力と、皆様の温かいご支援の賜物と、深く感謝申し上げます。

さて、この度、私どもの前会長である小濱博道氏が、長年にわたる天吹の保存活動へのご功勞により、「文化財功勞者賞」を受賞されました。私たちは、このような素晴らしい功績を残された先輩方の弛まぬ努力の上に、現在も活動を継続できており、改めて心より感謝を申し上げる次第です。

天吹は、もともと薩摩藩独自の地域単位である方限（ほうぎり）の郷中（ごじゅう）（青少年の集団）において、武術である自顕流や薩摩琵琶とともに嗜まれてきた伝統的な竹製の縦笛です。

明治以降、この精神と文化は学舎へと受け継がれましたが、一時期は急激に衰退しました。伝承は大田良一氏おひとりによって辛うじて守られ、その後、天吹柴笛振興会（昭和三十年発足、三十四年消滅）や天吹同好会（昭和五十六年発足）といった熱心な活動によって現代に引き継がれています。

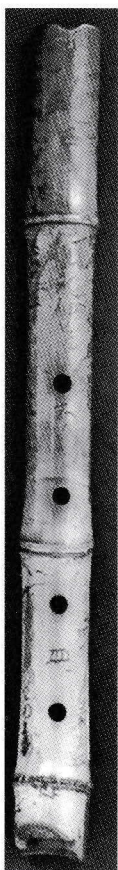
当同好会の主要な目的は、この貴重な伝統を次世代へ確実に受け渡すことです。現在、会員には三十代四名、二〇代一名、中学生一名、小学生二名と、多くの若い世代が練習に参加しています。彼らを育成することが、私たちの最も重要な責務です。特に今年は、八月に園児など十数名が天吹作りの体験学習に参加しました。この子たちが将来の担い手となることを願い、要所所で天吹に触れる機会を設けています。

特筆すべきは、参加した子どもたちの全員が野太刀自顕流の研修生であり、中には薩摩琵琶の練習にも参加している子供もおります。これはまさに、かつての郷中における「天吹・琵琶・自顕流」を三位一体とする精神を感得しながら成長する、郷中の姿の再現と言えます。その将来が楽しみであると同時に、その育成の責任を痛感しております。

本日は、ぜひこの機会に天吹を体験していただき、その素朴で深みのある音色に触れてください。また、琵琶の力強い撥音（ばちおん）を体感していただき、しばし薩摩の歴史と心を感じていただければ幸いです。

《天吹とは》

現存するもつとも古い天吹「安永十年（一七八二）」の刻印あり。



天吹について

天吹は、鹿児島だけに見られる長さ約 30cm、3 節 5 孔の竹製の縦笛です。各管で音の高さが異なり、独奏楽器として演奏されます。奏者自身が竹を採取して製作するのが原則です。

歴史

天吹は戦国時代から存在していたとされ、明治時代に一度衰退しましたが、昭和 30 年代に「天吹柴笛振興会」が結成され、復興運動が始まりました。

保存と現状

伝承曲と製作技術は、大田良一氏から白尾國利氏へと受け継がれ、楽譜化や製作方法の確立が行われました。昭和 56 年には「天吹同好会」が発足し、保存と継承活動が続けられています。天吹は、平成 2 年に鹿児島県の指定無形文化財に指定されました。

天吹同好会

天吹の保存継承を目的とした団体です。毎週(休)市内共研幼稚園にて練習しています。会員 39 名（女性 6 名）中、薩摩琵琶を奏する者 15 名、自顕流経験者が 22 名おり、琵琶天吹自顕流の三者ともに嗜んだ経験のあるものが、14 人おります。これはこの三者が藩政時代より、郷中教育の中で修練または嗜まれたものであり、その伝統が引き継がれていることによります。勿論音色や製作・また希少性に惹かれて入会したものも多く、多彩なメンバーで構成されています。同好会には「天吹は売買をするものではない。入場料をとる会場では演奏をしない」という不文律があり、これは郷中教育の精神を受け継いでいるといえるでしょう。

天吹同好会の活動

令和6年11月～令和7年10月

《平常の練習》於共研幼稚園

毎週(木) 5:30 ～ 7:00 昭和56年の発足当時から変わりません。

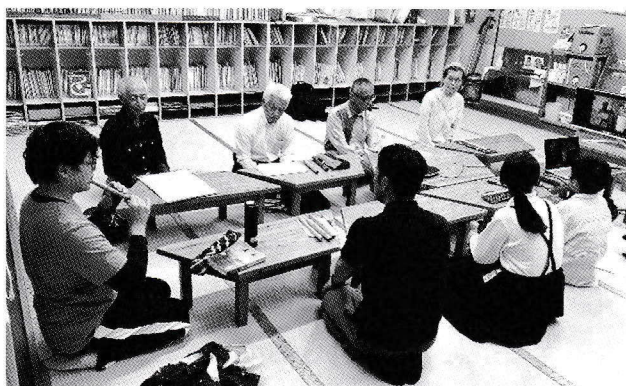
私たちの天吹の練習には、毎回10人弱が対面で、4人ほどがZoomで参加します。

まずはロングトーンで息を整え、各自が取り組んでいる曲を披露。練習の締めくくりは、「テンノシヤマ」「イチヤナ」「シラベ」、復元曲の「チゴデレ」を合奏します。

新入会員の方には、天吹を貸し出して全体の練習とは別に指導するため、初心者の方も安心して始められます。

コロナ禍には広い場所で椅子に座って練習していましたが、今年の7月から和室での練習を再開しました。今は、コロナ前のように膝を突き合わせる間合いで練習しています。和室での練習は、互いの音や息遣いを身近に感じられ、コミュニケーションも深まるため、日本の伝統音楽の練習にはより良い形だと改めて感じています。

また、神棚が設置されている部屋ですので、はじまりと終わりに手を合わせることも復活しました。



現在の和室での練習風景

《第 43 回記念会》令和 6 年 11 月 10 日（日）於県婦人会館

天吹同好会では、毎年 11 月に県民の皆様へ天吹の音色をお届けする演奏会を開催しております。昨年開催された第 43 回記念会では、復元された天吹曲「稚児デレ」を初披露いたしました。また、熊本より肥後琵琶奏者をお招きし、その音色を皆様とお聴きいただきました。

プログラム

天吹・解説と吹奏
稚児デレ復元・その理念と過程
肥後琵琶弾奏
天吹発表



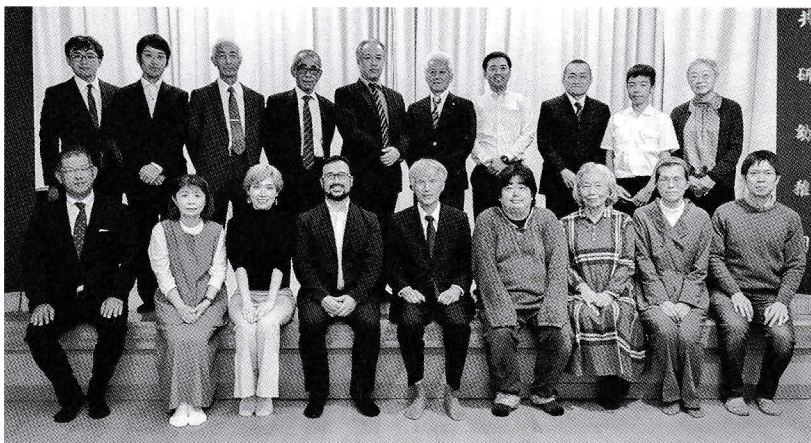
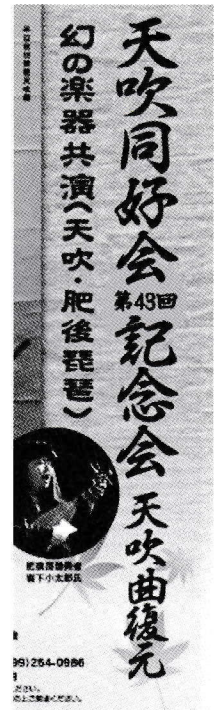
岩下氏肥後琵琶演奏



ラファエル氏稚児デレ復元について



柚木君(小 6)記念会初演奏



記念会終了後場所を共研幼稚園に移し記念撮影

《薩摩琵琶弹奏大会出演》

琵琶天吹 薩摩琵琶同好会は県民に開かれた年3回の定期的な弹奏大会を開催しています。そのいずれにも天吹同好会員は吹奏しています。琵琶と天吹は日新公が推奨されたと伝えられ、「琵琶天吹」と並び称されているので、琵琶会で天吹が披露されるのは、ごく自然な流れです。

令和6年11月24日(日) 第72回鹿児島市市民文化祭参加弹奏大会於中央公民館

令和7年5月25日(日) 第57回鹿児島県後援春季弹奏大会於黎明館

令和7年9月15日(日) 第51回鹿児島県後援秋季弹奏大会於黎明館



第57回鹿児島県後援春季弹奏大会於黎明館 柚木光さん(小6)が初舞台を踏みました。



《第 72 回東郷平八郎記念日式典》
令和 7 年 6 月 1 日（日）於多賀山公園



吉田氏タカネ 柚木君シラベを吹奏

毎年の恒例となっていた吉田会員による吹奏は、今年は柚木陽君との二人での演奏となりました。将来を担う若い世代に、この伝統が受け継がれていくことを願っています。



桜島を背景に記念写真



鹿屋航空基地儀仗隊

《第 44 周年総会》令和 7 年 6 月 29 日（日）



会長挨拶



練習成果の発表



毎年 6 月下旬に総会を開催しています。今年は 22 人出席。前列右より喜入、小濱 森山、赤崎、白尾、上川路、佐野、柚木。中列右より鈴木、亀割、柚木光、川上、新納、張、寺岡、後列右から宇都、吉田、湯川、古田、山本、古川、森の各氏。



《初めての試み・共研幼稚園おゆうぎ会で吹奏》 令和7年7月12日（土）



共研幼稚園のおゆうぎ会で、天吹を吹奏いたしました。初めての試みです。園生の4回のステージごとに二曲ずつ吹奏いたしました。柚木、寺岡、白尾吹奏。共研幼稚園は、共研舎が母体となつて設立されており、郷中教育の理念を園の教育方針に取り入れています。園庭、施設では天吹、琵琶、自顕流の練習が行われおり、これらに取り組んでいる園児もいます。

《加世田地区公民館で吹奏》令和7年7月13日（日）

旧加世田市竹田神社は、琵琶・天吹を奨励された島津日新公の菩提寺跡です。毎年恒例の琵琶弾奏大会に加え、今年は初めて天吹を吹奏いたしました。今後は、この琵琶と天吹の演奏会を恒例の行事としようとの話がでています。



《鹿児島神社六月灯》令和7年7月18日（金）



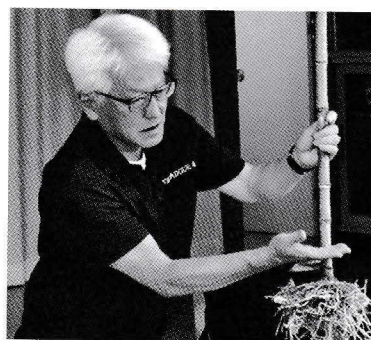
柚木光さんテンノシヤマ吹奏

《天吹製作》令和7年8月2日（土）

自顕流に取り組む園児・卒園生を対象として天吹製作ワークショップを開催しました。



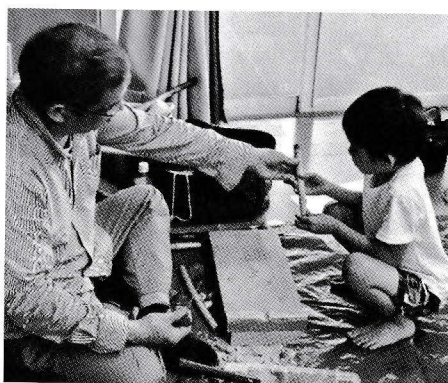
興味津々



根っこの上を切ります



ノコを使う



個人指導を受ける



ドリルを使う



将来の天吹奏者・マイ天吹を持って



《古武道大会》令和7年9月7日（日）



天吹同好会 39 人中 22 人は自顕流修練者・経験者です。自顕流研修生が、後に天吹同好会に入門するという流れができています。

《蒲生練習会の活動》

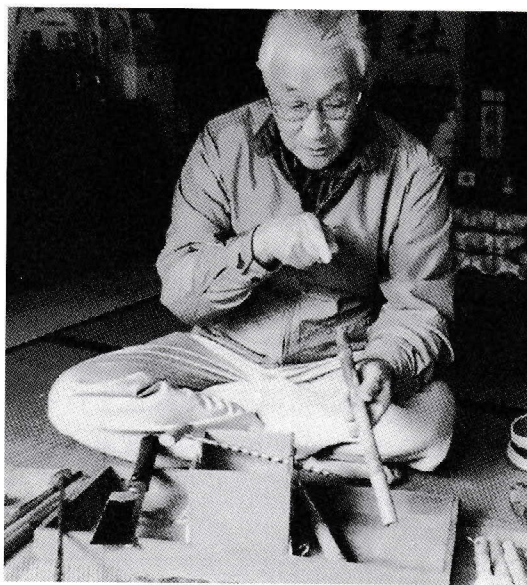
昨年六月発足した蒲生における練習会は現在会員が、四名（男性一名女性三名）。蒲生ふるさと交流館にて、月二回、蒲生在住の白尾師範の指導の下、練習を行っています。世話役の丸野氏は、加治木高校の生徒だった時、現在の指導者の父である白尾國利氏に教えを受けたことのある経験者です。



《訃報 当同好会師範 藤原和朗先生 逝去》



天吹指導一般向け講座にて



天吹の作り方収録 平成 30 年

去る令和七年七月十六日、当同好会師範藤原和朗先生（享年八十七歳）が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、生前のご指導とご厚誼に対し、深く感謝申し上げます。藤原先生は、昭和五十年代、霧島青年の家ご勤務の際、天吹継承者の白尾國利氏との出会いを機に天吹の道に入られ、長年にわたり当同好会の師範として、私共会員の熱心な指導に当たられました。特に、先生の「天吹作り」における卓越した技術と熱意は比類なきものでした。長年のご指導の賜物により、現在の会員が自ら天吹を製作できるようになったことは、先生の最大の功績の一つです。また、細かい工作を得意とされ、天吹作りのための道具類を自ら考案されるなど、その探求心と創意工夫は尽きることがありませんでした。さらに、ご自宅のある加治木では、加治木中学校と精矛神社にて長年にわたり天吹の指導を続けられ、郷土文化の普及にも多大な貢献をされました。先生が天吹に注がれた情熱と、その功績を深く胸に刻み、その志を継いでまいる所存です。安らかなるご永眠を心よりお祈り申し上げます。

藤原先生

天吹同好会副会長 赤崎 紳一

「こげな太かを作つどかい」とおっしゃり、ひとつの竹を除外された。これは自分が天吹同好会に参加してから、初めて竹切りに当時の小濱会長と藤原先生に同行させてもらったとき、藤原先生が切ったばかりの数本の竹を並べ、良いと思われる竹を選別されていたとき発せられた言葉であった。

その竹を見て初心者自分にはとても良さげな竹に映ったので、「それを自分がもらっても良いですか？」と、許可をいただき作つたのが、自分で初めて完成させた天吹となった。

藤原先生はどちらかと言うと細い竹より太めの竹を好まれるので、今にしてみればその時はよほど太く感じられたのである。うと拝察するしかないが、実際竹切りに行つてその場では素晴らしいと思われた竹でも、持ち帰つて改めて見ると太かったり細すぎたりと、今でもままあることである。

それでその竹で天吹を作つた次第ではあるが、当時は歌口の内側をどの程度削り込めば良いか分からなかったもので、ほとんどに作り藤原先生にみてもらったところ、初心者の自分がそれらしいものを作つたということに少々驚かれ、小濱会長に「このつさあが、こいをつくつたちよ」と見せられた。それから試しに吹かれ、「もちつと歌口の内側を削つたほうが良かど」とおっしゃったところ、そこにおられた伊藤先生が小刀を出され、それでその場で削つて下さり「うん、抜けが良くなった」と上々の評価をいただいた。以来、自分は教えて下さつたとおり、そこは出来るだけ深く削るようにしている。

藤原先生の天吹吹奏のご指導は、曲の一区切りごとに楽譜通り吹けるようになったことを確認して、次の一区切りに移るといった流れなので、一曲につき六か月から一年程度みっちりというスタイルであった。それを毎回ひとりひとり先生の元に呼び指導されるので、自分の番が来るのをドキドキしながら待つたものであった。

先生のご指導は丁寧かつ厳しかったが、その合間たまにニコつとされる笑顔が、こう言つては失礼かもしれないが、思ひの外可愛かったのが懐かしく想い出される。

天吹く薩摩武士に思いを馳せて 会員 脇田 大輔

私は現在、剣術の自顕流を学んでいます。きっかけは、故郷鹿児島传统文化を何か学んでみたいと思い、始めました。私が天吹に興味を持ったのは、昔の薩摩の武士達は剣術だけでなく、天吹や薩摩琵琶も学んでいた事を知ったからです。自顕流を学んでいくうえでも何かヒントになる事がないかと思い始めました。

私は基本、ズームでの参加ですが、天吹を吹く際の基本の細かい部分や自分の癖などを、白尾会長を始め先輩方に丁寧に修正いただき少しずつ学んでいます。また、人前だと音が全然出ないという事もあり、上手く吹こうと欲が出たり焦ったりするとダメなようです。毎日少しでも吹く事を目標にしております。また、会員の皆様との天吹関連の雑談話も密かな楽しみだったりします。

天吹を学んでいく中で自顕流と似ていると感じた所を述べておきます。(あくまで私の個人的な感想です。)

①丹田の意識

天吹では、腹式呼吸で丹田の意識が重要と学びました。自顕流でも発声や運足等を行う際等にも大事なようです。

②平常心

前述の通り、人前で吹けなくなるのは常に平常心でいられないからだと思います。自顕流においても気迫のこもった発声や斬撃を出そうとすると気持ちが高ぶり過ぎるので、そのような状況でも心は落ちついている事が大事なのだと思います。

③一息の呼吸

テンノシヤマの冒頭で、ロロハハロロハハの譜面を1234、1234の一定のリズムで一息で吹くようご指導いただいた事があります。自顕流においても1回の発声で4打を左右連続で打つ続け打ちの技があり、先輩方は8打を連続で打っておりました。一息で長く吹く(発声)できるように練習を続けたいと思いました。

私と天吹の出会い

ワークシヨップ参加児童保護者 田中 あゆみ

私が天吹という言葉初めて耳にしたのは、今から二年ほど前のことです。当時三歳の息子が、幼稚園の先生が吹奏してくれた、と嬉しそうに話してくれました。刀遊びが大好きで、鎧や戦に興味のある息子が、初めて自分から習



い事をしたいと言った野太刀自顕流を習い始めた時期と同じ頃です。

薩摩川内市出身の私にとっては、自顕流も天吹も馴染みがなく、どのようなものか分かりませんでした。毎週木曜日に幼稚園で行われている天吹同好会の活動を目にするようになり、天吹の音色が自然に耳に入ってくるが多くなっていました。

しばらく経ってからお喋り好きでお調子者な夫が、仲良くなつた先生から天吹をいただき、家で練習するようになったことがきっかけで、初めて直接触れる機会が訪れました。ところが、天吹を吹いてみて全く音が出ない、どうやれば音が出るのだろうと感じました。息を入れる角度が間違っているのか、吹き込む息の量の問題なのか、先生方が吹奏している動画を見ながら練習をしました。一週間ほど初めて音が出たときはすごくうれしかったです。一方、夫はというとなかなか音を出すことができず、勢いだけで先生に大切な天吹をいただいたのではないかと不安になり、申し訳ない気持ちになりました。そして負けず嫌いの私の心に火がつかしました。一つの音が出せるようになって違う音を出そうとすると、また音が出ず全ての音を出せるようになるまでは数カ月かかりました。

なかなか思うように音が出せないのも、天吹の魅力の一つだと感じ、仕事と育児と家事をこなす日々の中では、ほんの少しの家事の合間や夫と息子がお風呂に入っているわずかな時間しか練習をする時間はとれませんが、目に入るところに天吹を置いて、一日数分でも毎日触れるように心がけています

私が天吹を吹奏することで、自然と息子も天吹の音色や曲を耳にしてより身近なものと感じ、自顕流とともに、薩摩武士の嗜みとされている天吹を身につけ、心身健やかに育って欲しいと願っています。



田中さんご一家
妙円寺参りのいで立ち

天吹との出会い

会員 森 邦彦

私が鹿児島にやって来たのは丁度三十年前、八六水害の二年後のことでした。鹿児島はおろか九州にさえ訪れたこともありませんでした。鹿児島について何の知識もない私に先の職場の園田先生（園の字は草冠はつかないが鹿児島にルーツがあるらしい）が司馬遼太郎の「翔ぶが如く」くらい読んでおけ！と言われ、明治維新と薩摩、征韓論と西南戦争などについてはじめて深く学ぶことができました。また、登場人物の背景として描かれた郷中教育、薩摩琵琶、天吹などについても知ることができました。薩摩土族の生活風景や、静かな夜の情景を描く場面などで、天吹の音が「郷土の響き」として使われており、西郷どんや村人の心情を象徴するような、郷愁のこもった描写でした。しかしながら、この時は具体的な音色は想像するのみで、漠然と尺八や篠笛のようなものだろうと思っていました。

初めて本物の天吹を知ったのは某飲食店の若店主が縦笛のようなものを何気なく手にして「森さんこれ知ってる？天吹って言うんだよ」と言いつつ実際に音を出していただきました。小さな笛なのにとっても深みのある音色に驚き、私も吹いてみました。中学生の時少しだけトランペットを

吹いたことがあったのでそう難しくはないだろう、と安易に考えていましたが、この時はまったく音が出ることはありませんでした。その後も日をおいて何回かチャレンジしてみました。が、まったくダメでした。そんなことがあった後、その若店主から妙円寺参りに鎧姿で参加してみないか、と思いがけず声がけをしていただき、めったにない機会と思いい参加させていただきました。その妙円寺参りの直前に関ヶ原に行く機会がたまたまあり、島津義弘公の布陣場所などをみてきました。そんなこともあり妙円寺参りの本番当日は鎧を着せていただきながら、戦に行く前の武将の心意気に触れたような気がしました。また、最後の徳重神社の石段を登りつつ義弘公を忍ぶ薩摩人の心意気にふれた様な気がして、思わず涙してしまいそう。不思議な感覚になったことを覚えています。

さて、話を天吹に戻します。初参加させていただいた妙円寺参りの反省会が後日あり、その折に上川路先生とお会いすることができました。別れ際に、何と天吹を一本いただきました！それ以来少しずつ練習を重ねようやく音が出る頃になった時、天吹同好会に参加させていただきました。何回か参加するうちに天吹や薩摩琵琶、自顕流を思う薩摩人の思い、伝統を重んじる気持ちに触れることができました。



まだまだ満足に音も出せない駆け出しの身ではありますが、どうぞみなさんよろしくお願いいたします。

ついでに、私の生まれ育った町は北海道の斜里郡小清水町というところで、この町名は北海道には珍しく和名なのですが、開拓には鹿児島の佐藤市之助（薩摩藩士で西郷さんのもと西南戦争に加わっていた）が携わっていた、というところをつい最近知ることができました。北海道開拓の歴史には鹿児島人も深く関わっているのですが、私の故郷の町もそうだったと言うことは驚きでした。また、私の誕生日は東郷平八郎が率いて大勝利を収めた日本海海戦のあった日（旧海軍記念日）、私の結婚式をあげさせていただいた東京代々木の東郷神社（この時は私の誕生日が日本海海戦の日とは知りませんでした）など、縁もゆかりもないと思われた鹿児島も少しはつながりがあった」ということで天吹を含め改めて感慨を深くしております。



妙円寺参り 左から寺岡、森、湯川の各氏。いずれも同好会会員。森氏は寄稿文にある通り、北海道出身で縁あって今年会員とられた。

天吹との出会い

会員 黒田 浩司

私が天吹と出会ったのは、平成二十年の夏、野太刀自願流の合宿でのことでした。一日目の厳しい稽古を終え、夕食後の懇親会で、赤崎紳一さん（現副会長）から「自願流・薩摩琵琶・天吹は、薩摩武士の三つの嗜みである」と紹介され、自作の天吹を一本いただいたのです。小鳥のさえずりのような澄んだ音色に一瞬で心を奪われ、稽古の合間にも夢中で練習していたことを、今も鮮やかに思い出します。

その様子を見ておられたのか、福岡から参加されていた栗山晃さんが、後日、自作の天吹と譜面、さらには未加工のコサン竹を届けてくださいました。栗山さんも天吹を習いに鹿児島まで通われていたとのことで、相当熱心に天吹を練習したり、作ったりされていたようです。

先達諸氏からの聞き囁りや、『天吹』（平成十三年六月発行の簡易版）を何度も読み返しながら製作方法を調べ、自作してみているうちに、残りの竹も少なくなっていました。それで、私も竹を捜すところからやってみたくなり、赤崎さんのご厚意で何度か竹伐りに連れて行っていただきました。やがて、コサン竹の見分け方や、日当たりが悪く、湿気が多い所に生えているという植生が何となくわかるよう

になりました。本州にも自生しているのですが、雨の少ない瀬戸内海気候のせいかな、広島ではこれまで見つけることができていません。

そのため、十年程前からは、自願流の稽古始めの際は、川内川流域、北薩、人吉、大隅横川など、道中で竹伐りをするしながら鹿児島まで往復するのが恒例となっています。雨天の年もありますが、余程酷い雨でない限りは、合羽を着て竹伐りをします。野山に分け入り、市場に決して流通することのない、一点ものの天然素材を捜し歩くのは、何物にも代えがたい贅沢さを感じます。

天吹づくりは、硬く、縦方向の繊維で構成される竹という素材の性質を見極め、伐るとき、油抜きをするとき、歌口側と管尻側を切り詰めるとき、孔の位置決めをするとき、孔の内側を削り広げるとき……いずれも心を落ち着けて、手順どおり、細心の注意を払って作業しないと、すぐに取り返しのつかない失敗をしてしまいます。何度も失敗を繰り返す、コツや注意すべき点、致命的失敗を避ける準備や養生、工具の工夫などにより、頻度は減ってきてはいますが、失敗したときの悔しさといったありません。幾度も失敗を重ねて、ようやく「やり過ぎず、一度止めて考える」という姿勢が大切だと気づきました。それはまさに「ものづく



りを通じた精神修養」であり、心を落ち着け、熟考した上で果断に実行することそのものが修練なのだと思います。

吹くときもまた同じです。気持ちの持ち方、呼吸の強弱、歌口の当て方、いずれも細心の注意を要し、「一度で決める」という覚悟が求められます。これらは、まさに、いかなる場合に刀を抜くべきかを日頃から熟考し、一度抜いたら必ず敵を倒すという自顕流の「初太刀」に通じる姿勢であり、精神と技が一体とならなければならぬことを示しているのではないのでしょうか。

そもそも薩摩藩の郷中教育は、剣術や兵学だけでなく、琵琶歌や天吹、いろは歌の輪読会や詮議、さらには妙円寺詣りなどの様々な行事を通じて、年長者が年少者を導き、互いに切磋琢磨しながら「質実剛健なサムライ」を育てる教育体系でした。そこには芸事も遊びも、すべて心身を鍛える修練として組み込まれており、自顕流・薩摩琵琶・天吹はいずれも「己と向き合い、ただひたすらに修練を重ねる」という精神を通底させています。

「天吹を吹くときの呼吸は、自顕流の打ち廻りと同じ」とか、「天吹と薩摩琵琶と薩摩言葉とは、音の切り方の特徴が同じ」とか、「薩摩言葉を話さない人に薩摩琵琶を教えても無駄」など、話を聞いたり、本で読んだりすると、文化が

気候風土や言語と深く結びついてきたことを感じます。

数ヶ月前の稽古の際、地方色が色濃く残る鹿児島においても、徐々に薩摩言葉が話されなくなってきたてきっており、歴史や伝統を伝えていくのが難しくなっていくのではないかと、うお話がありました。私が生まれ育った備後地方も同じで、祖父母世代の正調備後弁を最後に聞いたのはもう二十年前も前のこと。方言は標準語に近づき、地域固有の歴史や伝統は急速に姿を消しつつあります。言葉はコミュニケーションの道具にして、社会的要因の影響を受け常に変化を続けるものであると理解していても、歴史や伝統とのつながりとともにあまりにも急速に失われていくことを残念に思う気持ちを押し止めることはできません。同じ気持ちを共有する幅広い世代の有志が集って、次世代の子供たちを育てる、そういう場に何とも言いようのない心地良さを感じます。

今年、上川路直光さん（副会長）のご推挙により、天吹同好会への入会をお許しいただき、新たな扉が開かれました。早速、天吹と自顕流、薩摩琵琶のつながりや、歴史・伝統に関する深いお話を伺うことができ、また、適した竹の選び方や『天吹』では不明だった歌口の内部の細かい作り込みなど、独学では知り得なかったことを学べる喜びを



若武者 柚木陽君

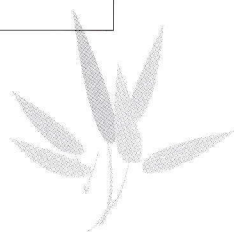
噛みしめています。

居住地や勤務の都合で稽古に十分に参加できないのは心苦しい限りですが、いつの日か力強くも流麗で味わい深い音を奏で、良い天吹を作り出せるよう、一步一步精進していきたいと思います。

白尾会長様をはじめ、先達の皆様方、ご指導を賜りますよう、どうか宜しくお願い申し上げます。

妙円寺参りと天吹

妙円寺参りは、関ヶ原の戦いの「島津の退き口」の苦難と、その不撓不屈の精神を偲ぶために、鹿児島城下から伊集院にある島津義弘公の菩提寺（現在の徳重神社）まで往復歩いて参拝する鹿児島三大行事の一つです。藩政時代に始まり、現在は武者行列、市内からのウォーキング、各武道の奉納等の総合的な行事となっており、天吹同好会員も共研舎の舎生として武者行列に参加しています。関ヶ原の戦いで天吹が吹かれたという文献もあり、同好会員にとって妙円寺参りへの参加は歴史的にも意義深いものです。



地方気質今昔

前会長 小濱 博道

現代の日本では、どの県の国道を車で走っていても、同じ企業の店舗が同じように並んでいて「別の県に来た」という感じがしない、という話をよく耳にします。どこにいても、同じもの、同じ情報が手に入る安心感が増えましたが、それと引き換えに地方の個性的な景色はなかなか見えなくなってきました。そして景色だけでなく、地方独特の「精神性」も薄れてきてしまっていないでしょうか。私は仕事の関係で、北海道、東京、九州など全国様々な出身の方とこ一緒にする機会に恵まりましたが、その方々はそれぞれ、その地方の特色を持つておられました。最初の赴任先は北海道でした。開拓で出来た新しい場所だからでしょうか、他県にみられるようなしきたりや風習はあまりなく、総じておおらかで明るく、開放的でありました。高知の人は豪放でありながら思いやりがあり、ユーモアもあるといわれますが、実際にそのような人が多く、親しくするのが楽しかったものです。わが鹿児島県人の気質というと、しきたりや伝統を重んじる人が多く、自尊心が強くて質実剛健、という感じでしょうか。それが意思貫徹の気骨も生んでいるように思います。自衛隊にいたときに、それを感じる出来事がありました。国分の部隊に赴任

してすぐに、師団長の訓練検閲というものがあり、百数十名の隊員とともに大分の日出生台（ひじゅうだい）演習場に向かいました。そこは昔から雷の名所として有名な場所なのですが、その日も、今でいうところの線状降水帯が発生しており、豪雨と共にそこら一体に雷が聞断なく落ちてくるという状況でした。訓練は真夜中に始まりますが、暗いはずの空は真っ赤です。検閲側も気にはしていますが、中止命令は出されません。しかし隊員たちは、そのような状況に不平不満を言うそぶりもなく、粛々と陣地に入り、工事をし、視察からは目が届かない遠い谷間の陣地までひとつの手抜きもなく、翌朝には見事な防衛陣地を完成させました。どのような時でもやるべきことを貫徹する。全国でも「名門中の名門」と称される部隊でしたが、鹿児島人の気質がそのような精鋭を生んでいるように感じたものでした。景色も気質も平均化され、違いがなくなっていく。それは便利で平等な良い時代になったということだと思えます。しかし同時に、その地方の風土や歴史に育まれてきた気質というものも、残っていつてほしいと願う気持ちがあります。それが日本の豊かな文化を育むものでもあると思うからです。伝統文化に携わっているものには、次世代にそのような良き気質を伝えていく、その使命もあるのではないのでしょうか。



《小濱前会長、文化財功労者として表彰！》



このたび、前会長の小濱博道氏が、鹿児島県文化財功労者として表彰されました。11月4日には県庁で表彰式が行われ、平成17年から15年間の長い間会長職にあつて、県指定無形文化財「天吹」の保存・継承への多大な貢献があったと称えられました。小濱氏からは「同好会を代表しての受賞」とのお言葉をいただきました。私ども会員一同、この栄誉を心から喜び、これからも「天吹」の活動に一層精進する所存です。下記は小濱氏が同好会に入会されたころの天吹に対する思いを語られた文章です。

伝統を継ぐ心

小濱博道

(平成8年15周年記念会誌掲載)

天吹同好会の稽古は、木曜日共研舎の一室をお借りして行っているが、最近急に人数が増え、現在は毎週十二三人が参集して白尾先生のご指導を仰いでいる。

活況を呈しているというのが、いつわらざる状況である。大変喜ばしいことである。この稽古に集まって来る人々の気持ちは皆一つであるように見える。

私は、天吹の稽古は他の現代楽器とは少し違うと考えている。それは何かというと、「古い良き伝統をそのまま継ぐ心」だと思う。

そこには現代の社会風潮にありがちな、自己PRも見ても何もない。同じ心の人々が木曜に集まり、先生の指導の下、ただ吹いているのである。

またそこには野太刀自顕流の伊藤先生の古武士然としたお姿が常にあり、天吹以外の薩摩の心もいろいろ教えていただけるのも有難い。

私は人に天吹を何故するのかと言われたら、この笛と出会った以上続けていかねばならないと答えている。

天吹に集まる人々が「無」の心になって、ただひたすら吹いているように、これからも少しでも魂の入った音が出るよう続けて行きたいものである。

天吹における学習過程とその文化的意義に関する研究…研究の構想と課題

瀬上ラファエル広志

①はじめに

天吹であれ尺八であれ、日本の民族楽器において最も重要な営みの一つは、その伝統を次世代へと受け継いでいくことである。しかし、この伝統音楽の継承とは、単に音楽的技法や曲を伝える行為にとどまらず、価値観、態度、道徳、情操、感性といった情意的・倫理的・美的領域をも含む多面的な要素を伝達する過程であり、人々の音楽性とともに人間形成にも深く関わっている。このような中で、日本の伝統音楽では、師範のもとで修練を積み、段階的に上達しながら免状を授与されるという家元制度が一般的である。一方、天吹の伝承にはこの制度が存在せず、尺八とも異なる独自の特徴が見られる。たとえば、芸能や娯楽を目的として演奏されるものではなく、天吹の伝承曲以外の音楽を吹いてはならないという不文律があり、営利目的での演奏・指導・楽器製作も禁じられ、奏者自らが楽器を製作することが原則とされる。このように、天吹は芸術表現の手段というよりも、薩摩武士の嗜みや情操教育の実践形態として受け継がれ、音楽を「演じる」ことよりも「伝える」ことが重んじられてきた。ここに、教育的実践としての重要な視点が見出される。

このような特徴を踏まえると、天吹における学習の目的とは何か。また、その過程でどのような価値観や美意識や人間性が形成されるのか。本稿は、このような疑問に直接答えることを目的とするものではないが、天吹に関する研究の中間報告、あるいはその概要紹介を行うものである。この問いを探索するために、筆者は2025年度、カワイサウンド技術・音楽振興財団の支援を受け、「天吹学習の過程とその文化的意義に関する研究」というテーマのもと、フィールドワークおよび東京音楽大学での公開講座を実施する予定である。

②天吹の歴史的背景と郷中教育の伝統

本来、天吹は薩摩琵琶や剣術である自顕流とともに、薩摩武士の教養として伝えられてきたとされる。現在、鹿児島市の共研舎では、天吹の練習が行われるとともに、薩摩琵琶や自顕流の修練も継続して行われており、鹿児島独特の音楽文化を継承する拠点となっている。

共研舎は郷中教育を受け継いだ「学舎」の一つである。郷中の「郷」とは、方限（ほうぎり）を指す用語であり、当時の薩摩藩における地域区分の単位であった。これは、いわば町内会のような小規模な地域であり、その「郷」に属する青少年によって構成される異年齢集団が「郷中」と呼ばれた。各方限には独自の伝統文化や教育が存在し、明治以降、それらの教育は「学舎」と呼ばれる集団に引き継がれた。

共研舎は、当初は青少年の健全な育成を目的とし、三方限（上之園、荒田、高麗町）の郷中教育の場として設立されたが、現在では幼稚園として存続しており、本研究において重要な対象となる。しかし、現在、学舎内ではどのように伝統音楽が受け継がれているか、その現状についての研究は殆どない。しかも、天吹はどのように学習され、その音楽性がどのように形成されていくのか。また、鹿児島音楽文化としてどのように推進され、次世代の継承者をどのように育成していくのかなど、多くの疑問が残る。

③ 先行研究の整理と本研究の位置づけ

天吹を取り上げた研究としては、田辺尚雄（1947）、久保けんお（1960）、白尾國利（1968、1969、1975、1977、1986）、上参郷祐康（1974）、上野堅實（1984）、月溪恒子（1975、1986）、西山秀利（1986）らの著書に、天吹の起源や成り立ち、奏法、楽曲分析などに関する記述が見られる。

一方、海外では、Malm（1959、1978）、Lee（1993）、Linder（2012）らが、尺八類の楽器を紹介する際に天吹について言及している。しかし、天吹そのものを主題とした研究は存在しない。

筆者はこれまでに、天吹の歴史のおよび楽器学的側面（2017）、演奏の実践と製作過程（2022、2023）、装飾技法の分析（2023）、天吹曲におけるリズム様式（2025）、天吹曲の復元演奏の研究（2024）を行った。

さらに、筆者は2023年度からカワイサウンド技術振興財団の支援を受け、国内外（ブラジル、アルゼンチンなど）で天吹に関する講義や演奏を通じて、その普及と研究の発展に努めている。2024年10月12日には、東京音楽大学で開催された公開講座「幻の笛『天吹』の復元演奏——現代に蘇る薩摩の士魂——」において、筆者が復元した天吹曲《チゴデレ》を白尾國英が初演した。

しかし、教育的観点から天吹を考察する研究は存在せず、天吹における学習過程を明らかにすることが今後の課題であると考えられる。

④研究の目的・対象および方法

本研究は、天吹における学習過程に焦点を当て、天吹特有の音楽文化がどのように受け継がれているのかを明らかにすることを目的とする。また、鹿児島地域における伝統音楽の継承を促進し、その文化の保存と発展に寄与することを目指している。

研究方法としては、資料調査・聞き取り調査・参与観察を柱とする。資料調査では、天吹伝承者である白尾國利が遺した視聴覚資料および紙資料をデータ化し、アーカイブを作成する。また、フィールドワークとして、天吹指導者および後継者に対してインタビュー調査を行い、共研舎での練習過程や精神性に関する意見を収集し、天吹の練習会への見学を行う。

筆者自身も天吹同好会の一員として演奏・製作に携わっており、自らの学習経験を踏まえた実践的視点から研究を進めている。これらの調査と活動を通して、天吹の歴史と成り立ちにおける学習の背景を明らかにするとともに、指導者と学習者の双方の立場から、天吹学習における精神性や音楽性を考察する。本研究は、地域固有の音楽文化に内在する教育的価値を学術的に明らかにし、伝統音楽の研究および音楽教育学に新たな視点を提供する点に意義がある。

⑤今後の展望

本研究の実践的展開の一環として、2026年3月29日(日)に東京音楽大学池袋キャンパス100周年記念ホールにおいて「現代に蘇る薩摩の士魂(その2)―天吹、琵琶、自顕流の真髄―」を開催する予定であり、これは天吹・琵琶・自顕流の連携を通じて、鹿児島島の音楽文化の継承と普及をさらに発展させる試みである。その詳細は、東京音楽大学附属民族音楽研究所のホームページにて公開される予定である。

今後は天吹の学習や演奏を通じた文化的・社会的理解の深化を図り、鹿児島をはじめとする地域社会における音楽文化の継承と発展に実践的に貢献することを目指している。こうした取り組みを通じて、天吹が単に保存継承される存在ではなく、現代社会における人々の精神的・文化的成長を支える存在となることを期待している。



参考文献

- 2017 “As tradições da flauta tenpuku: herança da cultura de Satsuma.” Anppom, 27, 1-8.
- 2021 “The Mysterious Tenpuku Flute: Cultural Heritage of Kagoshima.” Bamboo: Journal of the European Shakuhachi Society. Autumn/Winter, 20-25.
- 2021 「鹿児島県の『天吹』への実地調査の報告書」『伝統と創造』11, 47-53.
- 2022 「鹿児島県の『天吹』における演奏・製作とその文化的背景についての記録調査の報告」『伝統と創造』12, 67-78.
- 2024 “Report on the Restoration and First Public Performance of ‘Chigo-Dere’: A Traditional Tenpuku Piece Lost to Time.” Bamboo: Journal of the European Shakuhachi Society. Autumn/Winter, 46-49.
- 2025 「天吹曲《テンノシヤマ》におけるリズム様式と装飾技法との関係性についての研究」『伝統と創造』13, 13-24.
- 上参郷 祐康
- 1971 「邦楽大系 4——箏曲・尺八(二)」岸辺茂雄 編『尺八の歴史』(筑摩書房・日本ビクター VP3012/VP3013) 7-16.
- 1974 「吹禅——竹保流にみる普化尺八の系譜」『天吹楽略史——吹禅の理解のために』(日本コロムビア KX-7001-3) 9-22.
- 久保 けんお.
- 1960 『南日本民謡曲集』(東京:音楽之友社).
- Malm, William P.
- 1959 Japanese Music and Musical Instruments. (Rutland, Vermont & Tokyo: Charles E. Tuttle Company).
- Lee, Riley K.
- 1993 Yearning for the Bell: A Study of Transmission in the Shakuhachi Honkyoku Tradition. (University of Sydney).
- Linder, Gunnar Jinmei
- 2012 Deconstructing Tradition in Japanese Music: A Study of Shakuhachi, Historical Authenticity and Transmission of Tradition. (Stockholm University).
- 西山 秀利
- 1986 「天吹の音響学的研究」『天吹』1, 1-41.
- 白尾 國利
- 1968 「薩摩の天吹について」『さんざし』1月号~10月号.
- 1969 「天吹について」東洋音楽学会 編『日本・東洋音楽論考——創立三十周年記念』(東京:音楽之友社) 153-170.
- 1986 「天吹の伝承」『天吹』1, 1-173.
- 田辺 尚雄
- 1947 『笛その芸術と科学』(東京:わんや書店) 月溪 恒子 1975 「尺八の種類と歴史」『季刊邦楽』5, 13-19.
- 1986 「天吹の音楽学的研究」『天吹』1, 1-42.
- 上野 堅實
- 1984 『尺八の歴史』(東京:出版芸術社)



渕上ラファエル広志 Rafael Hiroshi Fuchigami

ブラジル出身。カンピーナス州立大学芸術学部でフルートを専攻した後、尺八に転向し、同大学大学院で修士号を取得。2013年、FAPESP (São Paulo Research Foundation) のスカラーシップにて、日本に半年間留学。2015年には、日本財団より5年間の奨学金支給を受け、再来日。尺八を柿堺香、菅原久仁義の両氏に師事し、横山勝也師の古典本曲及び琴古流を習得。2020年、東京音楽大学大学院博士後期課程にて尺八の研究で博士号を取得。2021年より、鹿児島地方の古楽器である天吹を白尾國英に師事。2023年、カワイサウンド技術・音楽振興財団の研究助成を受賞し、「天吹による稚児唄の復元演奏についての研究」というテーマで研究し、同年に花王芸術・科学財団の研究支援で「天吹の装飾技法の研究—尺八との比較から—」についての研究を実践する。現在、東京音楽大学附属民族音楽研究所特任研究員。日本音楽集団団員。天吹同好会会員。JSPN会員。

プログラム

一 天吹・解説と吹奏

白尾國英・会員

一 天吹試奏

来場者の皆様

休憩

一 薩摩琵琶「曲目・形見の櫻」二段」 解説と弾奏

上川路直光

一 天吹発表

会員



《薩摩琵琶》

薩摩琵琶は、日置市吹上町常楽院の開山である宝山検校が仏教の教えを広めるために始めた、盲僧琵琶が源流になっていると伝えられています。この盲僧琵琶を改良し、現在のような琵琶音楽にしたのは、戦国時代の島津忠良（日新公）と、当時の常楽院住職・脇寿長院です。この頃、琵琶が大形化し、演奏法も勇壮なものとなり、戦記物を語る時の伴奏音楽としてもはやされました。幕末になり薩摩藩が中央に進出するにつれ、琵琶も他藩の知る所となり、「薩摩琵琶」と称されるようになりました。島津忠義公（第十二代藩主一八四〇～一八九七）は自ら薩摩琵琶を製作するほど琵琶に親しまれ、明治天皇のお召しにより参内し、薩摩琵琶天吹柴笛を演奏させています。当時、琵琶天吹が藩主から藩士まで浸透しており、琵琶が東京に広まる要因となったことがうかがわれます。その後、薩摩琵琶は明治から大正にかけて東京を中心に全盛期を迎え、幾つかの流派に分かれます。本元の鹿児島では藩政時代の流れが学舎の中で受け継がれ、現在龍洋会と正風会の両派で薩摩琵琶同好会が結成されています。伝承曲には「蓬萊山」のような祝賀歌「城山」のような戦記物などがあります。

薩摩琵琶同好会は、昭和三十七年に鹿児島県指定無形文化財保持団体に認定されています。

《弾奏》 上川路直光



鹿児島県指宿市出身・鹿児島市在住。江戸時代、薩摩藩の武士階級を中心に継承されてきた教育機関「郷中教育」の流れをくむ学舎である「共研舎」において、平成七年より、伊藤

政夫に師事し、その中心的な活動項目であった一撃必殺の剣術「野太刀自顕流」、薩摩士風の醸成に欠かせない「薩摩琵琶」・「天吹」を修める。その後天吹同好会、薩摩琵琶同好会の一員として、共研舎を活動拠点にそれぞれの伝承育成活動に努めている。

現在天吹同好会副会長。薩摩琵琶同好会会員。野太刀自顕流研修会会員。薩摩琵琶共研舎道場主宰。

演奏略歴 奉納演奏…伊勢神宮、照国神社 他

教育機関…京都大学大学院、慶応大学、鹿児島大学 他

イベント…第三十回「国民文化祭参加」、「伝統の身体・

創造の呼吸」薩摩琵琶とともに」出演、「日越国際交流

会」、「妙音」熊本・東京公演 他

【天吹伝承曲】

七曲のみ。楽譜も唱歌（しょうが）もなく、すべて口頭によつて伝承されて来ました。（白尾國利氏が楽譜化）曲の長さは大田氏の録音演奏の長さです。

《テンノシヤマ》 比較的拍を取りやすいので入門者はこの曲から始めます。テンノシヤマとは始良市加

治木町にある蔵王岳の別名です。24秒

《センペサン》 センペサンとは実在の人物。通称伊藤善

平。センペサン・センペサンと呼びかけた歌が残っています。高く跳ね踊るようなりズム感を持った曲です。58秒

《イチヤナ》 これも「イチヤナニエモンサンナナア」という歌が残っており、その最初の歌詞

が曲名になっています。56秒

《アノヤマ》 明治の名人に野村直助という人がおり、

「まず名曲と申すなら彼の山（アノヤマ）「タカネ」「ツツネ」と言っています。テンノシヤマ・センペサン・イチヤナ・アノヤマの4曲には歌詞が残っています。しかし、大田さんは天吹には歌詞

《シラベ》

は無い。後から付けたものだと言っています。2分1秒

「シラベが吹ければ他の曲は難しくない」と言われています。全曲の基本となる曲です。「シラベ・タカネ・ツツネ」の三曲はゆっくりしたテンポで落ち着いています。51秒

《タカネ》

この曲だけに出てくる高い音があるので「高音」の意味とされます。悲痛の感があります。2分23秒

《ツツネ》

孔をすべて塞いだ低い音から始まるので「筒音」の意味とされます。7曲の中で最も長い曲です。「シラベ・タカネ・ツツネ」の三曲は純器楽曲で、歌詞はありません。3分53秒

【復元曲】

《チゴデレ》

二〇二四年同好会員の測上ラファエル広志氏によつて復元。伝承曲としてこの曲が存在したことは、太田氏の残した言葉によつて分かっていました。稚児歌「稚児でれ」を参考にした復曲。

令和7年度会員名簿

		氏 名	住 所
理事	会長兼師範	白尾國英	始良市
理事	副会長	赤崎紳一	鹿児島市
理事	副会長	上川路直光	鹿児島市
理事	事務局	柚木盛吾	鹿児島市
理事	会計	吉田雅章	鹿児島市
理事	監査	佐野雅雄	鹿児島市
理事	監査	川上久志	始良市
理事		田澤一彦	鹿児島市
会員		伊東丞士	鹿児島市
会員		伊東博文	鹿児島市
会員		宇都太賀	始良市
会員		内野令四郎	東京都
会員		小濱博道	鹿児島市
会員		大隣貴仁	鹿児島市
会員		亀割成子	鹿児島市
会員		川村晋平	横浜市
会員		喜入章夫	鹿児島市
会員		久保田佳代子	東京都
会員		黒田浩司	福山市
会員		白尾謙	鹿児島市
会員		島津義秀	始良市
会員		鈴木香代子	鹿児島市
会員		千堂洋一	鹿児島市
会員		高尾直宏	下関市
会員		寺岡晴雄	鹿児島市
会員		新納恵子	鹿児島市
会員		張紹好	鹿児島市
会員		福迫智子	鹿児島市
会員		藤井俊裕	鹿児島市
会員		瀧上ラファエル広志	東京都
会員		古川周平	鹿児島市
会員		古田芳光	鹿児島市
会員		牧之内敏朗	埼玉県
会員		森 邦彦	鹿児島市
会員		森山清隆	鹿児島市
会員		山下剛	鹿児島市
会員		山本博之	鹿児島市
会員		湯川浩司	鹿児島市
会員		脇田 大輔	神戸市

下記の場所で毎週練習を行っています。関心のある方はどうぞお寄りください。

事務局 鹿児島市上之園町 20-17 共研舎(共研幼稚園内)柚木盛吾 TEL 099-254-0986

練習会場 同上

時 毎週木曜 17時半～19時

